

私が「豊太郎の母はなぜ死んだのか」というテーマを選んだ理由は、文章中で明らかになっていない母の死因を調べることで、豊太郎の心情の変化などをより深く理解し、この物語の内容もより深く理解することができるのではないかと思ったからである。

また私は結論として、豊太郎の母は豊太郎に期待を裏切られたことからくる失望感によって自殺したのであるということを述べようと思う。

まず、この物語の時代背景から説明しようと思う。明治時代は社会が大きく変化した時代であり、新しい社会秩序の中で没落していく士族が後を断たなかった。さらに、勤勉、忍耐、新時代の知識学問などの修養によって身を立てる「立身出世」は、人間として価値のある行為だとみなされ、没落していく士族にとっては大きな夢だった。また、家長父制が浸透しつつある社会でもあったので、母子家庭の家などは肩身の狭い思いをしていた時代でもあった。

次に、豊太郎に対する母の期待について説明しようと思う。豊太郎は一人っ子であるが故に、母の期待を全て背負わされていた。さらに「余は幼きころより厳しき庭の訓えを受けし」という記述や「人の神童なりと褒むる」という記述からもわかるように、母の期待はとても大きいものだったことがわかる。また母の豊太郎に対する期待の具体的な内容は、先程説明した時代背景や、「我が名を成さんも、我が家を興さんも、今ぞと思ふ心の勇み立ちて」という記述からもわかるように「立身出世」「家名再興」である。

次に、豊太郎の母の自殺するまでの心情の変化について説明しようと思う。まず、豊太郎のドイツ留学が決まったとき、母はとても嬉しかったと思う。なぜなら、ドイツ留学というのは日本からは数える程の人間しか行くことができず、とても名誉あることだからである。さらに、ドイツ留学は「立身出世」「家名再興」などという目標を達成する大きなチャンスだからである。しかし、母は豊太郎が女に気を散らしていることを知ってしまう。このことは「余と少女との交はりやうやくしげくなりもてゆきて、同郷人にさへ知られぬれば、彼らは速了にも、余をもつて色を舞姫の群れに漁するものとしたり」という記述からわかる。そこで、豊太郎の母が味わった失望感というのは、今まで豊太郎の優秀さに頼って母子家庭というハンデを乗り越えてきたことや、豊太郎に全ての期待を寄せていたこと、豊太郎に対する期待はとても大きなものだったということなどから、尋常ではないものだったということがわかる。そしてその失望感が原因で母は自殺したのだと思う。また、母の手紙はその失望感を伝えるものだったのだと私は考える。

ここで私は、豊太郎は母の手紙を読んでも「我が学問は荒みぬ」とあるように、依然として「立身出世」という目標に対する意識が低くなっていることから、母の手紙は母の失望感を伝えるものではないのではないかと考えたが、「我が母は余を生きたる辞書となさんとし」という記述や「早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけん」という記述からもわかるように、豊太郎の中には母親に対する反抗心が芽生えており、その反抗心のせいで母の手紙を読んでも自分の意志を改めなかったのだと私は考えた。以上の

ことより豊太郎の母は豊太郎に期待を裏切られたことからくる失望感によって自殺したのだと私は考える。

よくわからなかったこと

親族の手紙の内容

参考にしたもの

教科書

国語便覧